

富山県

旧大庄村の石仏

資料作成：滝本やすし(石川県金沢市)



善名准胝庵跡の青面金剛と地藏

常願寺川は古くから暴れ川として知られ、幾度も氾濫を繰り返してきた。特に安政五年の地震に伴う2度の大洪水では、左岸の広い範囲に大きな被害をもたらした。また氾濫による濁り水の流入によって各地で疫病が流行した。常願寺川の堤防付近には、洪水によって流されてきた巨石が数多く残されている。またこの地域には、水の安全を願う水神塔や洪水による犠牲者の供養塔がいくつも建てられている。

大庄村は明治二十二年の町村制施行によって、田畠村、下番村、上馬瀬口村、下馬瀬口村、東荒屋村、上大浦村、中大浦村、下大浦村、西文殊村、花崎村、小原屋村、桑原村が合併して発足した。東荒屋は現在の中番、西文殊は現在の大栗である。この地域は昔、太田の庄と呼ばれていたことから、間を省略して大庄と名付けられた。

昭和三十年に、大山村、上滝町、福沢村と合併して大山町になった。平成十七年の市町村合併によって富山市に編入された。また昭和三十二年、富南村大場地区が南大場として大庄地区に編入された。

この地区には数多くの石仏がみられる。『大山町の石仏 第2集』（平成五年、大山町教育委員会）に報告されているので、参照していただきたい。

旧大庄村の個人宅では墓地などにも多くの石仏が残されているが、これらが未調査なのは残念である。これらの地域では屋敷神を祀る旧家も多く、報告されているのは一部のみで、悉皆調査は困難であろう。

花崎 共同墓地入り口／伝兵衛地蔵、六道供養塔など

熊野川に架かる文華橋の北詰に花崎共同墓地の入り口があり、伝兵衛地蔵堂と称される小堂と六道供養塔が納められた覆い屋が並んでいる。左手の切り通しの道は大山上野に向う旧道であり、文化六年に浮田覚右衛門が作成した『黒部奥山廻絵図』に「サイノ神坂」と記されている。

伝兵衛地蔵堂と称される小堂には、大きな地蔵が1体と小さな地蔵が5体納められている。全ての地蔵に「南無地蔵大菩薩」や「南無六道能化」と書かれたタスキが掛けられている。手法や石材がそれぞれ異なるので、これらは別々に作られたものである。『大山町の石仏 第2集』には、いちばん右の小さな浮彫り地蔵が「十村役の野口伝兵衛が奉納したとの言い伝えがあり伝兵衛地蔵とよばれる」と記されている。『大山町史』によると、野口家の五代と六代が伝兵衛である。以前は無施錠であったが近年は施錠されており、奥壁の石積みもセメントで固められている。

伝兵衛地蔵堂の左の覆い屋には13基の石造物が納められている。「バク」（釈迦如来の種子）、不明、「地蔵真言百万遍供養塔」が各1基で、他の10基は「地獄」、「餓鬼」、「畜生」、「修羅」、「人間」、「天上」、「聲聞」、「縁覺」、「菩薩」、「佛陀」と刻まれている。これら10基は六道と四聖を合わせた十界であるが、ここでは六道供養塔と称されている。以前は木造の覆い屋であったが現在は石造で、石塔の並び順も変えられ、セメントで固定されている。



花崎 路傍／准胝観音、弘法大師、青面金剛、五劫思惟阿弥陀など

花崎十字路交差点北方の路傍に、数多くの石造物が並べられている。向って左から順に見ていこう。

笠付円盤型の石仏は准胝観音で、周囲に梵字光明真言が刻まれている。嘉永元年、馬瀬口村の石工甚右エ門の作である。

右隣の木造小堂内には、中央に木造の釈迦如来座像が納められ、左に柄香炉を持つ地蔵と聖観音が、右には中世の如来形座像と地蔵が並べられている。

木造小堂の右隣には、自然石を彫りくぼめた龕の中に弘法大師座像が納められている。喉の病気にご利益があるという。

その右には、露座の地蔵、円柱型コンクリート製の龕の中に地蔵、同じく円柱型コンクリート製の龕の中に馬頭観音、石祠が並べられている。

さらに右の石造の小堂内には、1面6臂の青面金剛と「バン・南無青面金剛」の文字塔が納められている。青面金剛の頭部には馬頭が彫られ、「昭和十七年八月立替／三代目金山菊次郎／石工花崎宮本久」と刻まれている。金山菊次郎は西番の石工である。また「バン・南無青面金剛」の文字塔には、「延享元年／九月廿五日」の銘が刻まれている。

いちばん右の木造小堂内には、五劫思惟阿弥陀と馬頭観音が納められている。五劫思惟阿弥陀は角柱型の石塔に彫られ、肌には金泥が施されており、もとは笠があったと推測される。大正三年に発生した火災がこの辺りで治まったとこによって建てられたとされる。五劫思惟阿弥陀は法蔵菩薩とも称され、断食修行中の阿弥陀の姿である。立山街道周辺に数多く建てられている。

花崎十字路石仏群の数十メートル北の路傍にも小堂が建てられており、角柱型の阿弥陀三尊と光背型の阿弥陀如来が納められている。角柱型の阿弥陀三尊は、正面に阿弥陀如来立像が、右側面に観音菩薩立像が、左側面に勢至菩薩立像が浮彫りされている。阿弥陀三尊は大正十年、光背型の阿弥陀は大正十二年建立である。



准胝観音

花崎 路傍／五仏種子巡礼碑

花崎十字路から小原屋へ向かう道沿いに、五仏種子が陽刻された笠付角柱型の石塔が建てられている。剥落が進んでおり不鮮明であるが、これらは金剛界五仏種子であろうか。下部の碑文も剥落しており、判読困難な部分がみられる。『大山町史』によると、野口家の八代から十代までが伝左衛門であり、八代伝左衛門は近隣地区に数多くの石仏や石塔を造立している。また「野口伝左衛門の霊地巡拝碑(大栗村)」として写真が掲載されている。



花崎 曹洞宗瑞林寺／弘法大師

瑞林寺は、もとは駿河國氣多村(現在の浜松市天竜区)宮川にあったが、信州北安曇郡大町(現在の大町市)の雲松寺住職の達淳によって現在地へ移された。達淳は田畠出身で、当時花崎にあった瑞泉寺で修行し、雲松寺の住職となった。本尊は釈迦如来で、雲松寺を本寺としている。

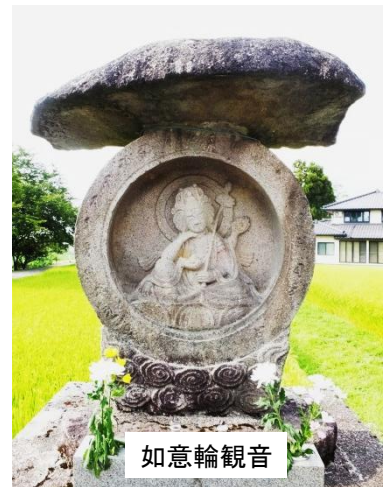
本堂手前右手の小堂内に浮彫りの弘法大師が納められている。また本堂の手前左手には石祠が建てられている。



弘法大師

花崎 路傍／如意輪観音

花崎十字路と花咲神社との間の路傍に、笠付円盤型の如意輪観音が建てられている。「当村同行中」と刻まれ、弘化四年建立。花崎十字路北の准胝観音と同じ作風で、こちらも馬瀬口村の石工甚エ門の作である。



如意輪観音

上大浦 路傍／阿弥陀三尊

上大浦の真成寺前の路傍に木造トタン張りの小堂が建てられており、笠付角柱型の石塔が納められている。正面に阿弥陀如来立像が、右側面に観音菩薩立像が、左側面に勢至菩薩立像が浮彫りされている。各面に細かく銘文が刻まれており、文政十三年に若連中によって建てられたことが記されている。以前は施錠されていたが、堂が建て替えられて、現在は施錠されている。

堂の裏手には、昭和七年造立の地藏と弘法大師が並んで建てられている。



阿弥陀三尊

中大浦 高野山真言宗福円寺跡／阿弥陀三尊、弘法大師、不動明王、板碑など

中大浦の福円寺跡に、阿弥陀三尊、弘法大師、不動明王が並んで建てられている。阿弥陀三尊には安政五年、弘法大師には昭和六年、不動明王には明治三十五年建立の銘が刻まれている。

対面するコンクリートブロック製の小堂内には丸彫りの地蔵立像が納められており、周囲には5基の板碑と丸彫りの女神立像が置かれている。このうちの2基の板碑には半跏地蔵が浮彫りされている。また1基には金剛界大日の種子である「バン」が刻まれているが、他の2基は信仰標識がはっきりとしない。



半跏地蔵板碑

大栗 路傍／阿弥陀三尊、五劫思惟阿弥陀など

大栗集落南外れの路傍に、6基の石造物が集められている。笠付円盤型の阿弥陀三尊、地蔵4体、笠付角柱型の五劫思惟阿弥陀である。阿弥陀三尊には明治二年、五劫思惟阿弥陀には大正四年建立の銘が刻まれている。



五劫思惟阿弥陀

小原屋 路傍／木造麻耶夫人、地蔵、如意輪観音

小原屋公民館近くの路傍に、2棟の小堂が建てられている。左の堂内に木造の麻耶夫人立像が、右の堂内には地蔵と如意輪観音が納められている。麻耶夫人は2体の天人を従えて、足元には誕生した釈迦がみられる。江戸時代中期に江戸で3体が製作されたうちの1体で、富山市指定文化財となっている。如意輪観音の裏面に天保九年造立の銘が刻まれている。



木造麻耶夫人



地蔵と如意輪観音

中番 路傍／五劫思惟阿弥陀

中番の路傍に五劫思惟阿弥陀が建てられている。大正十二年に高田家が自宅前に造立したもので、以前は露座であったが、平成元年に石造の小堂が建てられ、中に納められた。



五劫思惟阿弥陀

田畠 路傍／如意輪観音、青面金剛など

田畠公民館横の路傍に木造の小堂が建てられており、4体の石仏が納められている。堂の右手には笠付円盤型の青面金剛が建てられており、その間にも小さな地藏が置かれている。堂内の如意輪観音は文化十年、馬瀬口村の石工甚右エ門の作で、「山城六角堂」と刻まれている。青面金剛は安政五年、善名の石工栄蔵と甚蔵の作である。



田畠観音堂内の石仏

馬瀬口 路傍／馬頭観音

馬瀬口集落の北の外れの路傍に石龕が建てられており、馬頭観音が納められている。大正三年に高見家の敷地内に建てられたと伝えられており、後に現在地へと移された。



馬頭観音

馬瀬口 曹洞宗梅香寺／「法華塔」、「大般若理趣分塔」など

梅香寺は、寛保元年に梅香によって天満宮の別当として開山。しかし梅香没後の天明三年から無住となっていたとされる。明治初頭に復興、玄中達妙尼が一世となった。本尊は釈迦如来。

本堂左手前に、笠付角柱型の大きな石塔が建てられている。正面上部に聖観音立像を浮彫り、下部に「三界萬靈」と刻まれている。大正九年造立。

本堂右裏に歴代の無縫塔が建てられている。その右には「法華塔」と「大般若理趣分塔」が並んで建てられている。その間には方錐型板碑が置かれているが、信仰標識は判別困難である。大般若理趣分塔は右側面に「寛政五丑歳五月吉日／願主…」、左側面に「…石屋喜三郎」と刻まれている。石塔の下に大般若理趣分(大般若波羅密多經卷第五百七十八第十会般若理趣分)が納められているのであろうか。



「大般若理趣分塔」

馬瀬口 天満宮／十一面観音、地藏など

馬瀬口天満宮北口脇に木造の小堂が建てられており、十一面観音と2体の地藏が納められている。その左には5体の石仏がそれぞれ小さな石龕に納められている。これらは、梅香寺の石塔群と背中合わせに位置している。

十一面観音の光背に「寛政十二申歳九月吉日／西國二番十一面観世音菩薩」、台石に「三界萬靈」と刻まれている。右の地藏は手に数珠を持っており、光背に「為三界萬靈／…申四月吉日」と刻まれている。また左の地藏は両手で宝珠を持つ座像で、光背に「享和三癸亥年正月吉日／願主泰仙寒念佛若連中」と刻まれている。泰仙は当時の梅香庵(現在の梅香寺)の庵主で、梅香寺歴代墓標群の中に文化元年銘の無縫塔が建てられている。梅香寺は天明三年から明治初頭まで無住であったと伝えられているが、これらの石仏や石塔に記されている銘との矛盾がみられる。



十一面観音と2体の地藏

善名 曹洞宗勝光寺跡／如意輪観音、聖観音、「六十六部供養堤」、など

上善名の市道脇に勝光寺跡がある。勝光寺は大川寺十二世益寿によって寛文二年に開山、明治三年の富山藩合寺令によって光厳寺に吸収合併された。明治十二年に復興したが、昭和後期に廃寺となった。

勝光寺跡入り口のコンクリートブロック製の覆い屋には、2体の地蔵、聖観音、如意輪観音が納められている。如意輪観音に寛政九年銘が刻まれている。その右に小さな笠付円盤型の石塔が建てられており、聖観音を浮彫りし、慶応二年銘が刻まれている。勝光寺の跡地はきれいに整備されており、墓標を含む三十基ほどの石造物が残されている。



勝光寺跡の石仏や石塔など

勝光寺跡のすぐ隣の路傍に木造の小堂が建てられており、聖観音、地蔵2体、准胝観音、十一面観音が納められている。堂の左手前に六十六部供養塔が、右手前には笠付角柱型の青面金剛が建てられている。

六十六部供養塔は笠付角板型の石塔で、正面上部に阿弥陀如来立像が浮彫りされ、その下に「奉納／六十六部供養堤／天下和順／日月清明／當國産／行者勇平」と刻まれ、左側面に「元治元甲子年／八月十五日立之十方施主」と刻まれている。台石には世話人名と立会人名が刻まれている。

青面金剛は1面6臂で、2童子を従え、下部に4夜叉、3猿、2鶏が彫られている。左側面に「嘉永五壬子年三月」、裏面に「石工／當村／甚蔵」と刻まれている。



「六十六部供養堤」

善名 曹洞宗准胝庵跡／「大乘妙典塔」、「靈場供養法華塔」、青面金剛など

下善名の農地の一角に准胝庵跡があり、木造の小宇が建てられている。准胝庵は善名の中川伯教によって建てられた庵で、明治三年の合寺令の対象外であった。伯教は馬瀬口天満宮などに数多くの奉納物を納めている。長年荒廃して草木が茂りうっそうとしていたが、近年整備されて明るくなった。

建物の手前左手に2基の石塔、建物の左側に2基の石塔と2体の石仏、右奥に3体の石仏と1基の石塔、1基の石祠が残されている。また隣接する墓地内には5基の無縫塔と10基ほどの石造物がみられる。

いちばん手前に建てられている石塔は道標を兼ねた墓標のようであるが、剥落が激しく判読困難である。

その奥に建てられている笠付角柱型の石塔は、正面に金剛界大日座像が彫られ、その下に「三界萬靈」と刻まれている。慶應二年、石屋村の石工牧喜右エ門の作である。

建物の左側に建てられているのは、「靈場供養法華塔」、「大乘妙典塔」、地蔵、青面金剛である。三十余年前に訪問した時にはもう1体地蔵があったのだが、どこかへ移されたのであろうか。

「大乘妙典塔」は角柱型で、裏面に「石經壺部書寫上瀧前大川廿五世■■■／干時天明七丁未歳冬十月大吉祥日敬立／紙經壺部書寫善名住中川十五代孫伯教」と刻まれている。また台石には「三界萬靈等」と刻まれている。

「靈場供養法華塔」は笠付角柱型で、正面左右に「奉順禮大日本國／一百八十八箇所／一石一字一字三禮／願主中川伯教敬白」と刻まれている。左側面から裏面に続けて「中川元祖何某云徳圓居士桃井之族本州善名之人也……(長文のため省略)……」とあり、善名中川家の事や伯教の靈場巡礼などについて細かく刻まれている。銘文は右側面まで続き、最後に「干時文化丁卯季秋如意満足日／願主中川十五代孫伯教敬白」と刻まれている。

青面金剛は光背型で、1面6臂合掌形である。光背に「寛保三…／十月吉日」の銘が読み取れることから、富山県内の在銘の青面金剛としては4番目に古いものである。



「靈場供養法華塔」



青面金剛

建物右奥の石塔は納経塔で、弘法大師座像が浮彫りされている。明治二十八年建立、石工西田弥之助の作である。

納経塔の右隣の光背型の3体の石仏は、長谷式十一面観音、薬師如来、合掌地蔵である。いずれも明治三十六年三月二十八日造立で、長谷式十一面観音の台座に石工西田弥之助と刻まれている。

県道から准胝庵への入り口にも、弘法大師座像が浮彫りされた納経塔が建てられている。こちらは明治三十八年建立で、准胝庵のものと同じく西田弥之助の作である。



長谷式十一面観音、薬師如来、合掌地蔵

下番 路傍／青面金剛

下番南端の路傍に笠付円盤型の石塔が建てられており、1面6臂の青面金剛が浮彫りされている。天保十二年建立で、近隣に見られる4基の笠付円盤型のうちで最も古いものである。下部に3猿が彫られているが、2童子や4夜叉などは彫られていない。



青面金剛

下番 公民館／「ふ動明王尊」、如来形座像、半跏地蔵など

下番公民館の裏手に9基の石造物が並べられている。右から順番に見ていこう。

いちばん右は笠付円盤型の石塔で、3体の如来立像が浮彫りされている。中央が金剛界大日、右が阿弥陀、左が釈迦である。周囲に梵字光明真言が刻まれ、裏面に文久三年建立銘が刻まれている。三如来が彫られた笠付円盤型の石塔は、近隣の月岡にもみられる。



下番公民館裏の石造物群

右から2番目は自然石の石塔で、正面に大きく「ふ動明王尊」と刻まれ、右側面に昭和十一年建立の銘が刻まれている。

その左にコンクリートブロック製の覆い屋が建てられており、薬師如来と2体の地蔵立納められている。いずれも下番の個人宅にお守りとして置かれていたものである。

さらに左には宝形造りの小堂が建てられており、コンクリートブロック製の覆い屋で保護されている。この小堂内には、中世の如来形座像が納められている。

続けてその左は笠付円盤型の石塔で、明治十五年、西番の石工金山菊次郎と北野甚助の作である。

左から2番目は、石龕の中に中世の半跏地蔵が納められている。氷見の藪田石製で、呉西から能登にかけて多数みられるがこの辺りでは珍しい。本来は神社の御神体とされていたものと考えられており、明治の神仏分離の際に外へ出されたのであろうか。

いちばん左は半割にした自然石に「南無阿彌陀佛」と刻まれた名号塔で、下部に蓮弁が陰刻されている。



半跏地蔵



「疫神社」

下番 下番神社／「疫神社」

下番神社境内に自然石の石塔が建てられている。正面に「疫神社」と刻まれているが、他には文字などは刻まれていない。「疫神社」と刻まれた石塔は上野の大山寺参道や太田路傍などにもみられ、大山寺参道のものには明治二年の銘が刻まれている。